

Title	2015 第2回スピリチュアルケア研究会報告「私はこのように生きてきました : ささやかな自己開示を通して」助川雄氏 (聖学院大学大学院・聖学院大学人間福祉学部教授)
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.2, 2016.3 :22-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5622
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 第 2 回スピリチュアルケア研究会報告 「私はこのように生きてきました～ささやかな自己開示を通して」 助川征雄氏（聖学院大学大学院・聖学院大学人間福祉学部教授）



上段：助川征雄教授（発題者）

2015年11月24日、午後3時40分から開催。本学教職員、学生、外部の研究者を加えて、15名（不確定）が参加。

助川先生はご自分が歩んでこられた人生をご誕生に遡って、ご祖父母様から現在の自分がどのように形成されたかを丁寧にお話くださいました。特に岩手の久慈での生活、お母様の苦勞、叔父さまの経済的支援、昭和天皇のお召し列車での出来事、幼い時にみた虚無僧の様子、密造酒作りの近所のおばさんの話し、覚醒剤中毒の元神風特攻隊との日々、栄養失調のクラスメイトの話し、キリスト教との出逢いや海外への憧れなど、実に多くの内容をお話くださった。

その中でも助川先生を精神保健福祉のソーシャルワーカーとして生かした出来事に、若い日に出会ったアルベルト・シュヴァイツァー博士の本があり、フィンセント・ファン・ゴッホの絵、棟方志功の版画、フランシス・タルレガの曲との出逢

いがあると述べられた。

ソーシャルワーカーとして悲嘆をもつ人と関わって来たが、悲しみの中で頑張っている人たちの姿に真実があると言われた言葉が私の心に強く残った。助川先生の語る「真実」には、スピリチュアルケアに通じるものが多くあった。スピリチュアルケアは、患者や利用者を支え導いているものを探し出してエンパワーすることであると理解できる。支え導いているものこそ、当事者の「真実」であり、否定できない現実である。その「真実」を見つけ出すこと、その「真実」と向き合うこと、そしてその「真実」をエンパワーすることがスピリチュアルケアだと思えるからである。助川先生が「真実」と言われたことは、当事者に負わされた現実であり、かつ、生き様の根底で支えるものだと理解した。

助川先生のお話を聴きながら、先生の生き方自身が非常に真摯であり誠実であり、一途さを持っていることに感動した。その一途さの対象は人生という普遍なものへの真実さである。特に、弱い人たちへの支援をご生涯の課題として生きてこられた先生の話しには、心癒すものがあり、今までの先生のご指導を受けた学生への影響の大きさを感ずるものであった。精神保健福祉士の知識や技術だけではなく、人としての生き方を示してくださった。今回のご発表の副題が「ささやかな自己開示を通して」であったが、正に、先生の自己開示には、誠実さと真面目さが滲みでていたが、それは先生の生き方自身だったと合点したのである。

スピリチュアルケア研究会では、今までもスピリチュアルケアギヴァー（ケア者）の問題を扱わなかった訳ではないが、今回の研究会は正さにケアギヴァーの在り方を考えさせる発表だった。どちらかという知識や技術の問題が議論されやすい領域であるが、本質的にはスピリチュアルケアはケア者の人格や生き方、価値観、患者観、人間論が大きな課題である。鑑みると、助川先生の今

回のご発表は非常にスピリチュアルケアにたずさわるものには、正鵠を得たご発表であった。ご発表の後の質疑の時間に、小森英明氏（武蔵野大学）より、仏教では「捨身飼虎」という言葉あり、それは飢えた虎に自分の身体を差し出した仏の話であると説明があった。それは、スピリチュアルケアギヴァーになる人への心構えとも通じることであって、聞きながら心の底を打つものがあった。

助川先生が最後に持参された100年前に作られたギターで「禁じられた遊び」とF.タルレガの曲などを弾いてくださった。それは青年時代からギターの音に癒された助川先生の癒しの時間を私たちと共有するものになり、聴かせていただいた私たちの魂はその音色で心の底まで癒された。音楽のスピリチュアリティに触れる大変心地よい時間になった。この研究会のためにいろいろご準備くださった助川先生に心からの感謝を申し上げます。

今年度は、これで二回の研究会を開催した。スピリチュアルケアは医療、看護、介護、教育の世界ではますます注目を集めるテーマである。物質的豊かさを求める経済中心の社会では、人間は真の幸福を見つけることができないことは、すでに明らかである。世界の貧困問題、経済格差、政治的混乱など大きな問題を抱えた時代にあって、スピリチュアリティへの関心はグローバルな視点を与えてくれる。それも個人的利益や幸福だけではなく、人間の根源的問題を見るときの視点を与えてくれる。宗教に絡む社会問題が起きて不幸なことに宗教への偏見が起きている。いのちの根源に関わる魂の問題をスピリチュアルな視点から再考することで、新しい世界観、公共的視点が生まれてくると思える。今後もスピリチュアルケア研究会の課題として個人の問題も、グローバルな問題もスピリチュアリティの視点から研究しなくてはならないと改めて思った研究会であった。

（文責：窪寺俊之 [くぼてら・としゆき] 聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授）